

総力戦とは何か ークラウゼヴィッツからルーデンドルフへー

ジャン・ヴィレム・ホーニッヒ

1941年3月30日、ドイツ帝国の上級軍事指導層がアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) 総統の演説を聞くためにベルリンの総統官邸に集った。この集会は将官 200 人に対し差し迫った対ソ攻撃を指示することを目的とするものであった。「バルバロッサ」というコードネームを付された計画の上級立案者であったフランツ・ヘルダー (Franz Halder) 将軍は、日記にヒトラーのメッセージの核心を慎重に記している。

我々は兵士の間にある同志の交わりという概念を忘れなければならない。共産主義者は戦闘の前後にかかわらず同志ではない。これは殲滅戦である。このことを理解しなければ、我々は敵と戦い続けなければならないどころか、30 年後に共産主義者の敵と再び戦わなければならない。筆者は敵を温存するために戦争を行うのではない。

ヘルダーは冷静に考慮した上で、こうまとめている。ある種の紛争は歴史上、二つの社会の間で戦われた最も無慈悲で致命的な紛争へと発展するだろう。ソ連とナチス・ドイツの戦争が「総力」という形容詞に値することにはだれも反対しないだろう。なぜなら暴力が両国の社会をまったく関係のない市民に至るまで包み込み、浸透しているからである。

近年の歴史学では、「総力戦」は形成に長い時間をかけて出来上がったもので、優にフランス革命にまでさかのぼることのできる現象であり、また、歴史を通じてあらゆる戦争および紛争の表面近くに隠れ、その浮力によってしばしば表面に現れる現象であるという説が有力である。フランス革命以来、それがより一般的になったとすれば、理由はその時に近代国民国家の権力が最終的に全社会を効率的に戦争に駆り立てることのできるレベルの完全性を獲得したからである。このように巨大な人間のおよび技術的破壊手段を解き放つことには抵抗できるものではなく、また驚くべき現象ではない。戦争は本質的に野蛮で妥協のない活動であり、自然にエスカレートする。事実上、フランス革命は政治を戦争に付随するものに変えてしまった。このように総力戦は選択および陰謀の戦争というよりもむしろ、自然の要求の戦争としてみることができる。そうした戦争は政治・社会的な発展の一定の段階に到達すると、自然の要求として生起する。

¹ Ian Kershaw, *Hitler: A Biography* (New York: W. W. Norton, 2008), p. 599 から引用。

この種の議論の流れでは、「総力戦」という言葉自身が第二次世界大戦の開戦直前に生まれたということは、多くの場合、人が長時間かけて分析を重ね、事物に適切に命名するということを強調するに過ぎない。従って、特定の軍事評論家や政治評論家によって新たに造り出される言葉とその陰に潜む思想を関連付ける試みは興味深い、最終的には現象の存在を説明するのにそれほど役立つものではない。実際、伝統的に最も緊密に総力戦の思想の概念化および一般化に関係している者は、第二次世界大戦で何がしか重要な働きをしたという罪から、近年、ほとんど解放された。それに対するエーリヒ・ルーデンドルフ (Erich Ludendorff) 将軍の思想は「独創的でもなければ興味深くもない」という言葉で表されている。彼の 1935 年の著書『総力戦』は「つまらないことを繰り返し述べており」、仮にそれが何らかの影響力を有するなら、「直接的な影響はタイトルにあった」であろう²。ワシントン DC にあるドイツ歴史協会の助成を受けて、最近、刊行された権威ある 5 巻本シリーズで注目されているこの評価は、広範囲の詳細な歴史の中で総力戦の現象を考察したものである³。ルーデンドルフは幸運なことに一つの章が割かれている。クラウゼヴィッツは、「絶対的戦争」と「総力戦」が一緒くたになるほどに彼の「絶対的戦争」の概念が長い間「総力戦」と密着していたにもかかわらず、一章を与えられていない⁴。密接な関係があったとしても、筆者がこれから見るようにそれ

² Roger Chickering, “Sore Loser: Ludendorff’s Total War”, in Roger Chickering and Stig Förster, eds, *The Shadows of Total War: Europe, East Asia, and the United States, 1919–1939* (New York: Cambridge University Press, 2003), pp. 176–7.

³ 他の巻は、Stig Förster and Jörg Nagler, eds, *On the Road to Total War: The American Civil War and the German Wars of Unification, 1861–1871* (New York: Cambridge University Press, 1997); Manfred F. Boemeke, Roger Chickering and Stig Förster, eds, *Anticipating Total War: The German and American Experiences, 1871–1914* (New York: Cambridge University Press, 1999); Roger Chickering and Stig Förster, eds, *Great War, Total War: Combat and Mobilization on the Western Front, 1914–1918* (New York: Cambridge University Press, 2000); Roger Chickering, Stig Förster and Bernd Greiner, eds, *A World at Total War: Global Conflict and the Politics of Destruction, 1937–1945* (New York: Cambridge University Press, 2005)である。総力戦はさらにフランス革命までさかのぼらなければならないというこのシリーズの編者たちの主張を強調するために、最近、彼らは序論的な巻として、Roger Chickering and Stig Förster, eds, *War in an Age of Revolution, 1775–1815* (New York: Cambridge University Press, 2010)を追加刊行した。

⁴ 本論文を読めば分かる通り、これは正しくないが、マイケル・ハワード (Michael Howard) やピーター・パレット (Peter Paret) のような著名なクラウゼヴィッツ学者はしばしば用語をまとめている。例えば、Michael Howard, *Clausewitz* (Oxford: Oxford University Press, 1983), p. 47 および Peter Paret, “Clausewitz”, in Peter Paret, ed., *Makers of Modern Strategy from Machiavelli to the Nuclear Age* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1986), p. 199 を参照。こうした問題が 1976 年のハワードとパレットの『戦争論』の翻訳に影響したかについての議論は、Jan Willem Honig, “Clausewitz’s *On War*: Problems of Text and Translation”, in Hew

は完全には正しくない。その差異は次のことを示唆している。すなわち、ルーデンドルフとクラウゼヴィッツは彼らの用語を慎重に選択し、知的で実際的な当時の軍事的、政治的環境と緊密に切り結んでいるという意味で時代の申し子であったにもかかわらず、彼らはその時代の軍事的挑戦を効果的に行うための明白で類例なく適切な何かをつかもうとした。自らを無力であるとする歴史家たちは、思想を、より強力な基礎力の表明であると見なすか、フェルナン・ブローデル (Fernand Braudel) を引用すれば、「歴史の潮がその強靱な背中に乗せて運ぶ、表面攪乱、泡の頂点」と見なした⁵。彼らは思想が実際の戦争行為に付与した重要な方向性を控えめにすることができる。

筆者がこれから論じるように、クラウゼヴィッツもルーデンドルフも重要な概念化を行っており、それを理解する読者がいた。どのように戦争が展開するかという理論、戦争はどのように戦われるべきかという規範について、彼らほど明晰で一貫性を持って唱えた者は少なかった。20 世紀前半、先進世界の軍隊の間で実際的な優位性を奪い合う二つの戦略的技術の裏には重要な示唆が潜んでいた。両者は自分たちの気に入った戦略的技術と、戦争に意味と目的を究極的に付与するもの、すなわち政治の関係という基本的な問題に取り組もうとした。(このことはおそらく一般に認識されていないが) ルーデンドルフはより知的に明晰な解答を提供することに成功した。しかし、彼の解答は彼らが経験した戦域において社会的に受け入れ難いことが明らかになった。その主たる理由は、敵の範囲を定める線をどこに引くかであった。クラウゼヴィッツが敵と戦い、勝利する「より良い」方法を提案したと言うのではない。多くの近代戦の経験が示唆するように、彼は敵を大きな意味を持つ行為主体とは見なかったために、不適切な戦争の方法を提案したとして非難され得る。

絶対的な戦争と決定的な戦闘

軍事思想と実践に関するクラウゼヴィッツの主な貢献は、決定的な戦闘の有用性と、それが戦争行為の中心であることを合理的に説明したことである。彼の論法は単純でわかりやすいものであった。戦争目的が一方の意思を気の進まない相手に武力によって押しつけることであるとするならば、相手方に防御や抵抗を続けることができないところに立たせれば成功は保証されるであろう。日常的な言葉に置き換えれば、クラウゼヴィ

Strachan and Andreas Herberg-Rothe, eds, *Clausewitz in the Twenty-First Century* (Oxford: Oxford University Press, 2007), pp. 57–73、特に p. 64 以下を参照。

⁵ H. R. Trevor-Roper, “Fernand Braudel, the Annales, and the Mediterranean”, *Journal of Modern History* 44, 4 (Dec. 1972), p. 475 (from the Préface of the 1st ed. of *La Méditerranée*) から引用。ブローデル (Braudel) はもちろん思想にではなく、(政治的) 事象に言及している。

ッツは政府をヨーロッパにある国家の政治的意思の制御手段と見なした⁶。それらの第一の、そしてほとんど唯一の防衛線は、統制の取れた常備軍隊であった。軍隊の破壊は政府を無防備にし、政府に課せられた要求を鵜呑みにせざるを得なくする。敵の軍隊を破壊する最も効果的な方法は、一つ決定的な戦闘を徹底的に戦うことである。戦略的技術の真骨頂はナポレオンが余すところなく示したが、重大な戦闘に勝つ条件を生み出すことにある。

19 世紀にヨーロッパ全土を通じて次々に誕生した参謀大学で教えることが可能であったドクトリンの発展に、一見して実際の基礎を提供する理路整然とした理論があった。もう一つの重要な副産物は、軍隊の官僚的で職業的な独立のための正当性理論とドクトリンという形で提供したことであった。戦争は社会内の他のいかなる行動とも異なる特殊な行為であった。従って、特殊な訓練を受けた人間集団によって最良になされ得るものであった。19 世紀にヨーロッパで軍隊を排他的な「暴力の管理者」にした職業化の過程もまた、戦争から政治を抜き取る効果を発揮した。戦争は広く国家の政治的道具として見られていたとしても、政治的目的と敵の抵抗手段を破壊する戦略的目的の関係は、せいぜい間接的なものに過ぎず、それぞれ異なる官僚機構によって達成される。

決定的な戦闘の理論は、主要かつ規範的な仮定に基づいている。その仮定とは常備軍の破壊によって、敵国は戦闘に勝った側の要求を受け入れるというものである。この仮定はクラウゼヴィッツ以来、政治的なヨーロッパ世界によって有効なものと広く受け入れられていたかもしれない。そして、ナポレオンの実践とその後の 19 世紀の戦争で、その有効性が確認されたかもしれない。しかし、普遍的な有効性が確認されているわけではない。クラウゼヴィッツはそこに問題があることに気づいた。干戈の交わりは正規軍を超えて広がり、例えば国民全体を巻き込む。しかし（ここで再び一定の政治的規範のバイアスが彼の議論に介入した）、クラウゼヴィッツは国民が武力で敵に意思を押しつける道具になることはなかろうと信じていた。一例を挙げると、国民軍は適切な組織と訓練を欠きやすい。従って、彼らは簡単に敗北するか、降伏するように脅迫され得る。クラウゼヴィッツの存命中、スペインで起きたように、決意の固い国民が敵の勝利を阻止することに成功したとしても、蜂起した国民は侵略者から主導権を奪ったり、最終的に勝利したりすることはできないであろう。そのため、クラウゼヴィッツは統制の取れた正規軍が必要であると確信していた⁷。

⁶ 国家および国家と戦争の関係に関するクラウゼヴィッツの見方については、Andreas Herberg-Rothe, Jan Willem Honig and Daniel Moran, eds, *Clausewitz, the State and War* (Stuttgart & New York: Franz Steiner, 2011)を参照。

⁷ Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, ed. Werner Hahlweg (Bonn: Dümmler, 1980), Book VI, Chapter 26: "Volksbewaffnung" (Arming of the People).

晩年になって、クラウゼヴィッツは彼の最も洗練された議論を生み出した。それは一般的に有効でないとする非難に対して、彼の理論の基本的教義を保護することを目的としていた。彼は、戦争は手段であることをやめ、無意味ですさまじい暴力に変化するという自らの理論における絶え間のない疑いから完全には免れることはできなかった。ここでもまたクラウゼヴィッツは彼自身の偏見を露呈することになる。彼はすべての理由を捨て去った戦争というものを仮定することができなかった。それゆえに、彼の思想の要約と見なされ続けている章で述べているように、彼はなぜ戦争が実際には究極的なところまでエスカレートしないのかと反問する前に、なぜ戦争が究極的なところまでエスカレートするのかという疑問を提示した。彼は『戦争論』の冒頭の章で、理論上の戦争と現実の戦争を慎重に区別している。理論上の戦争は現在、「絶対的な戦争」という新語で慎重に表されている。それは現実の世界を苦しめる不確実性や不純物から放免あるいは解放される現象を強調している。勝つためには、各戦闘員が敵に対して最大限の破壊力を示すという確たる意図を持って戦争しなければならないという単純な理由によって、絶対的な戦争は絶え間なくエスカレートする。一方の当事者がそうしない場合、戦力をさらに増強して、その当事者を圧倒する抗し難い機会を敵対する側に与えることになる。しかし、「無駄な努力」(ein unnützer Kraftaufwand)は事実上、エスカレーション理論の厳密な適用により容易に生じる⁸。この「論理的な暴虐」に「人間の精神」は従属することを拒否するだけではない⁹。より明らかなのは、その理論は「政府の能力の基本的原理」に反しているということである。後者は戦争が政治的目的に叶うことを要求した。幸いなことに、現実にはエスカレーションは非効率的であったため、時間が問題になってくると、政治家が戦争に介入し、道具としての利用を模索する機会が生まれた。

かつて、筆者は、クラウゼヴィッツが戦争はいずれにしても決定的な戦闘で戦われるのが最適であるという考えに精力的に、あるいは必死に固執しようとしたが、政治的目的がいろいろと変化することでこの戦略的目的がどのように影響されるのかについて満

⁸ Clausewitz, *Vom Kriege*, Book I, Chapter 1, §6, p. 196.

⁹ テレンス・ホームズ (Terence Holmes) は『戦争論』(*Vom Kriege*)の印刷版に印刷ミスがある可能性に私の注意を喚起した。その初版から“daß der menschlichen Geist sich dieser logischen Träumerei schwerlich unterordnen würde.”と読まれている文があるが、ホームズは同じ章の原稿で現代の編者は Träumerei を Tiranney として読んでいることを発見した(Carl von Clausewitz, *Schriften, Aufsätze, Studien, Briefe*, ed. Werner Hahlweg (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990), Vol. 2, Pt I, p. 633)。手書きのゴート語では二つの語は混同しやすい。理論は現実には思いつかれないので、Tyrannyの方がより意味をなす。また、圧政下にある者は夢を見ない。

足のいく説明ができなかったと述べたことがある¹⁰。そうした戦略が機能するためには、前述のように、戦争当事者の双方が正規軍同士の戦闘が政治的な損得をもたらす戦略的に有効な動因であるということを受け入れる必要があった。戦争の政治的合理化が変化すると、暴力は戦場および正規軍間の衝突を超え、技術はその効力を失う。仮に軍隊の職業化によってその主たる活動が政治から切り離されるならば、問題はより一層深刻となったであろう。軍隊は最後には間違った敵と戦い、政治的不適切に直面することになる。

総力戦と大量虐殺

エーリヒ・ルーデンドルフ将軍は、これらの軍事理論と実践における弱点を痛切に感じていた。なぜならば、それらは彼の戦争に対する効果的な職業的理解を維持しながら、彼に対して陰謀を企てたからである。ドイツ帝国軍を統轄して第一次世界大戦での破壊と敗北に陥らせた人物として強制的に退役させられた後、彼が自らの経験を顧みたのは当然であった。彼の総力戦理論は、1937年に死去する二年前に発表された。それは軍事専門家の戦争に対する制御を再構築するだけでなく、政治的效果と戦争との間の失われた紐帯を再確立しようとするものでもあった。

ルーデンドルフの総力戦概念は、彼が戦争の政治的合理化における転換と、その結果、生じた手段とへ方法を変化させる必要性をいかに首尾よく内面化したかを表している。19世紀、国民解放の要求から生じた圧力が増し、それがヨーロッパ全体で、国内から体制変化を突き動かすプロセスを促進した。フランス革命以前の王朝支配の上に安穏としていた体制は、今や、速度は様々であるが、国民による民主主義という性格を帯びた体制に変化している。このことは、国際戦争であると正当に言うことができるものの大義が、王朝の権利の擁護から、国民共同体の利益と権力のはるかに曖昧で柔軟な概念の擁護へと変化したことを意味する。旧体制時代との明らかな違いの二つ目として、王政におけるプレイヤーすべてが（すべてと言っても少数であったが）、存在する権利を与えられていた時、国民が存在するための権利は当然ながら争点となるという考えも、とりわけ右翼民主主義者の間で、まさに出現していた。近代国際システムは本質的に、そして、当然の権利として、国民国家がその生存を賭けて互いに争う無政府状態となっている¹¹。

¹⁰ Honig, "Clausewitz's *On War*" and id., "Clausewitz and the Politics of Early Modern Warfare" in Herberg-Rothe et al, *Clausewitz, the State and War*.

¹¹ こうした「現実主義者」の思想の台頭の詳細については、Jan Willem Honig, "Totalitarianism and Realism: Hans Morgenthau's German Years", *Security Studies*, 5, 2 (Winter 1995),

国家の生存競争の中で、各国家の増大する利害関係は、当初、政府と軍によって敵軍との決定的な戦闘を戦うために訓練された益々多くの国民を動員する方向に向けられた。しかし、実際に戦争で経験して明らかになり始めたのは、いくらかの不安定な発達であった。大規模な軍隊を動員するには大規模な国内の支援態勢を必要とする。国民国家が大衆動員を組織するために効率的な手段を提供する一方で、戦争行為の支援において社会の多くの要素が関与することによって様々な点で脆弱性が生じた。厳しい戦闘に耐えるために兵士が選抜され、訓練される一方で、「銃後」の一般市民は用意ができていなかった。仮に彼らが何らかの形で攻撃されれば、前線で敗北することなしに国家は壊滅するかもしれない。社会が分断され、弱い政府によって統治されれば、そうした可能性は高まるであろう。他方、戦争はそうした高い危険性を内包するため、常備軍が戦闘で敗北しても不正規軍によって戦争を続けることが可能であるかもしれない。

1918 年秋に西部戦線で帝国軍が壊滅すると、ドイツ最高司令部は安易にもドイツ国民を動員することを考えた¹²。しかし、その試みが失敗すると、国内の脆弱性と分裂のためにドイツは負けたという説の有効性が確認されたかのように思われた。ワイマール共和国の経験はさらに、内部分裂で崩壊した国は非友好的な国際環境の中で存続することは言うまでもなく、国内的に適切に機能し得ないという多くの人の考えを確固たるものにした。ルーデンドルフが後に彼の理論の中で結び付けた要素に賛同する者が著名な右翼知識人の中に現れるまで、それほど時間はかからなかった。「総力」という形容詞が、ドイツの多くの社会的、政治的病弊を解決するのに提唱された方法を顕著に表していたということも驚くべきことではなかった。この言葉は両大戦間にドイツにおいて流行した。その流行は右翼だけのものではなかった。知識人の多くは社会問題への急進的であるが社会的に包括的な答えを探していた。例えば、1927 年に建築家ヴァルター・グロピウス (Walter Gropius) は、「総力劇場」用に新しい設計を提案している。それはすべての観客を、直接、劇中に役者として取り込もうというものであった。軍事と総力の問題の最初の大規模な人々の結合は 1930 年に行われた。その時、作家エルンスト・ユンガー (Ernst Jünger) は「総動員」を支持する有名なエッセーを書いている。彼はこう書いている。仮に第一次世界大戦が将来のために一つの教訓を残したとするなら、それは、「もはや剣を振りかざすだけでは足りない。戦争は、中心、最も奥にある神経に対して武装することが必要である¹³」ということである。1933 年、ナチスが権力の座につ

pp. 283–313 を参照。

¹² Michael Geyer, “Insurrectionary Warfare: The German Debate about a *Levée en masse* in October 1918”, *Journal of Modern History*, 73 (September 2001), pp. 459–527.

¹³ Ernst Jünger, “Die totale Mobilmachung”, in id., ed., *Krieg und Krieger* (Berlin: Junker und Dünhaupt, 1930), pp. 9–30. 引用は 14 ページから (“... genügt es nicht mehr, den Schwertarm zu

いてほどなく、後に連邦共和国で憲法学者として尊敬を集めることになる法学者エルンスト・フォルストホフ (Ernst Forsthoff) は「総力社会」という小冊子を発表している。彼はその中で、その支配を社会のあらゆる要素にまで拡大した国家のみが、国家として存続し得るとした¹⁴。

その形容詞が直接「戦争」と結び付くのは驚くべきことではない¹⁵。その中で、ルーデンドルフは彼の先駆者たちよりもさらに重要な一步を踏み出した。全体国家と総動員は戦争で勝利するための不可欠な前提条件を提供した。しかし、それらは戦略的目的を特定しなかった。国家の存続という政治的目的を確保する戦争を遂行して勝つための方法や戦略的技術を特定しなかった¹⁶。ルーデンドルフは見失われた戦略目的を特定している。「総力戦は武装した軍隊だけを狙うのではなく、一般の国民をも直接狙う¹⁷。」こ

rüsten, — es ist eine Rüstung bis ins innerste Mark, bis in den feinsten Lebensnerv erforderlich)”。ユンガーほかルーデンドルフの先駆者たちについては、Hans-Ulrich Wehler, “Absoluter” und “Totaler” Krieg: Von Clausewitz zu Ludendorff”, in Günther Dill, ed., *Clausewitz in Perspektive, Materialien zu Carl von Clausewitz: Vom Kriege* (Frankfurt: Ullstein, 1980), pp. 488–491 を参照 (筆者は本論文を長年、参考にしている)。同論文は最初、*Politische Vierteljahresschrift*, Vol. 10 (1969), pp. 220–248 に発表された。ユンガーと彼の「保守的革命」文学者 (“Soldatischer Nationalismus”の代表者としても知られる) の集まりについては、Wolfram Wette, “Ideologien, Propaganda und Innenpolitik als Voraussetzungen der Kriegspolitik des Dritten Reiches”, in Wilhelm Deist et al., *Ursachen und Voraussetzungen des Zweiten Weltkrieges* (Frankfurt am Main: Fischer, 1989), esp. pp. 51–58; Stefan Breuer, *Anatomie der Konservativen Revolution* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1993) and Armin Mohler, *Die Konservative Revolution in Deutschland, 1918–1932: Ein Handbuch*, 4th ed. (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1994) を参照。

¹⁴ Ernst Forsthoff, *Der totale Staat* (Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt, 1933)。フォルストホフの 1930 年代の理論は、彼が大いに影響を受け、後に極端な論争を招いた恩師カール・シュミット (Carl Schmitt) の理論に基づいている。ルーデンドルフの二年後、シュミットは全体国家と総力戦の概念を彼自身の全体的敵という概念と統合した (“Totaler Feind, totaler Krieg, totaler Staat”, *Völkerbund und Völkerrecht*, Vol. 4, No. 3 [June 1937], pp. 139–145)。

¹⁵ この結び付きは最初に第一次世界大戦期にフランスで行われたが、1935 年以降、ルーデンドルフの著書がヨーロッパを席卷するまで、ほかの国ではそれほど支持されていなかった。フランスでの最初の使用については、Beatrice Heuser, *Reading Clausewitz* (London: Pimlico, 2002), p. 119 を参照。

¹⁶ ルーデンドルフが付け加えたもう一つの重要な要素は、国家によるプロパガンダの使用で、それは国家の「感情的な親密さ (seelische Geschlossenheit)」を確保することを目的としていた。その新規性と重要性については、現象を間近で見えて書かれたものでありながら、依然として独創性を保っている広い見識を持ったドイツの国籍離脱者ハンス・スパイア (Hans Speier) の論文 “The German Concept of Total War”, in Edward Mead Earle, ed., *Makers of Modern Strategy* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1943), pp. 315–318 を参照。

¹⁷ Erich Ludendorff, *Der totale Krieg* (Munich: Ludendorffs Verlag, 1935), p. 6. “So richtet sich also der totale Krieg nicht nur gegen die Wehrmacht, sondern auch unmittelbar gegen die Völker.”

の考えが防御的な政治目的——国家の存続——によって究極的に正当化されたにもかかわらず、この戦略目的は攻撃的な手段によって追求されねばならなかった。国家にとっての最良の安全は他国の殲滅により生じる。こうして総力戦には全体的——政治と戦略の両方——な目的を追求するための全体国家による総動員が含まれた。しかし、ルーデンドルフが生み出したものがどんなに恐ろしいものと思われたとしても、それは政治的要求に直接、適合した戦争の筋の通った外見上、実際的な概念であった。

ルーデンドルフは他の論者から、断りなく多くのものを借用している。政治は戦争の継続にほかならないという彼の悪名高いクラウゼヴィッツの言明の逆用は、他の手段によって他人から借用したものである¹⁸。クラウゼヴィッツは無視すべきであるという彼の主張と合わせて、ルーデンドルフの政治は戦争に従属するものであるという主張は、冷酷な老將軍は道具でない戦争の提唱者であり、無意味で消費するばかりの暴力に至る自己奉仕的な軍国主義的価値を政治的理論の原理の代わりに用いたという安易な結論に通じるものであった。こうした見方は完全に間違っている。ルーデンドルフは苦勞して、現代の政治的条件はクラウゼヴィッツの敵の軍勢を破壊するという目的によっては満たされないとして説明した。しかし、ルーデンドルフは戦争を道具として見なし続けた。事実、彼は政治は戦争を意味づけるという原則に固執した。それは国家の存続という究極的な政治的公共財を確保する努力に役立つに違いない国家の政策であった。基本的な意味において、自分では認めたがらないながらも、ルーデンドルフはこのようにクラウゼヴィッツに近かった。彼がクラウゼヴィッツと異なるのは、敵の定義と敵に対処するに必要かつ適切な戦略的技術においてであった。彼は現実の戦争はできる限り国家でなく国民を攻撃して無防備にするまでエスカレートすべきであると考えていた。国民の武装を解除するには市民一人ひとりを敵と考え、合法的な標的と見なすことが必要であった。クラウゼヴィッツがルーデンドルフの提唱した大量虐殺戦略を、人間の精神を授けたと考え、「統治術の基本的原理」の一部になり得たという理由で正当化できると考えていたというのは信じ難い¹⁹。

ルーデンドルフは、保守的な革命権についてユンガー、フォルストホフほか多くが持つ思想とは基本的に異ならないと述べている。將軍は戦争の概念のための人気ある包括的形容辞はドイツでは細分化されてすでに広まっていた²⁰。例えば、ルーデンドルフの

¹⁸ 著名な社会学者ハンス・フライヤー (Hans Freyer) がおそらく初めて *Der Staat* (Leipzig: Ernst Wiegandt, 1926), p. 142 に書いたことである。ホイザー (Heuser) によれば、ソ連のシャポシニコフ將軍もルーデンドルフより前に同じ表現を使っている (Heuser, *Reading Clausewitz*, p. 67)。

¹⁹ Andreas Herberg-Rothe, "The State and Existential War", in Herberg-Rothe, Honig and Moran, eds, *Clausewitz, the State and War* を参照。

²⁰ Julia Sywottek, *Mobilmachung für den totalen Krieg: Die propagandistische Vorbereitung der deutschen Bevölkerung auf den Zweiten Weltkrieg* (Opladen: Westdeutscher Verlag, 1976). Wette,

後を襲って第一兵站總監となり、国防相も歴任したヴィルヘルム・グレーナー (Wilhelm Groener) 将軍は、ルーデンドルフの著書には基本的に新味はないと考えている²¹。特に、その思想は国家社会主義的政治階層とドイツ国防軍の最高指導層も共有していた。1933 年から 38 年までドイツ軍参謀総長であり、ドイツの再軍備と戦争準備の中心人物であったルートヴィヒ・ベック (Ludwig Beck) 上級大将は、総力戦思想の有用性を素直に受け入れた。後に彼は考えを翻すが、在職期間中、彼は演説と覚書で一貫してルーデンドルフの用語を使って将来の戦争の性質を描いた²²。

『総力戦』はドイツで即座に成功を収めた。1935 年 12 月に最初に発行されてから 4 ヶ月後には、第三刷が出、発行部数は 12 万部に達した。ドイツ国内での成功を受けて、その本と思想は外国にも急速に広まった。1936 年のフランス語版はその不朽の成功によって、フランス語の「総力戦」という用語を、よみがえらせた²³。イギリスでは、ルーデンドルフの著書は速やかに発行されたにもかかわらず、少し時間がかかった。翻訳者は明らかに用語が新奇で、なじみのないものと感じていた。そこで彼はタイトルを『「戦

“Ideologien, Propaganda und Innenpolitik”; Ludolf Herbst, *Die totale Krieg und die Ordnung der Wirtschaft: Die Kriegswirtschaft im Spannungsfeld von Politik, Ideologie und Propaganda, 1939-1945* (Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt, 1982), pp. 35–63 も参照。

²¹ Michael Geyer, *Aufrüstung oder Sicherheit: Die Reichswehr in der Krise der Machtpolitik, 1924-1936* (Wiesbaden: Franz Steiner, 1980), p. 484. しかし、ガイエル (Geyer) は、ルーデンドルフとナチスの「戦争は一つの生き方である」という思想を新しいものとしている。軍隊の指導層の多くは、こうした考えは戦争は「限定され」、「制御され」たものであり、政治的、戦略的目的に沿うものでなければならないという彼らの職業的確信に反すると感じていた。彼の“German Strategy in the Age of Machine Warfare, 1914-1945”, in Paret, ed., *Makers of Modern Strategy*, pp. 527-597 も参照。ガイエルの用語は独特である。(覇権主義的なものも含めて) あらゆるタイプの戦争を限定的なものとするのは (p. 535 を参照)、戦争のための戦争を除き、限定戦争の意味をあまりに拡大し過ぎている。

²² ベックの文書に関しては、Ludwig Beck, *Studien*, ed. Hans Speidel (Stuttgart: Koehler, 1955) および Klaus-Jürgen Müller, *General Ludwig Beck: Studien und Dokumente zur politisch-militärischen Vorstellungswelt und Tätigkeit des Generalstabschefs des deutschen Heeres 1933-1938* (Boppard: Harald Boldt, 1980) を参照。ベックについては、引用したミュラーの文献と、その発見をまとめた次の論文を参照。Müller, “Clausewitz, Ludendorff and Beck: Some Remarks on Clausewitz' Influence on German Military Thinking in the 1930s and 1940s”, in Michael I. Handel, ed., *Clausewitz and Modern Strategy* (London: Frank Cass, 1986), pp. 240–266 および “Colonel-General Ludwig Beck, Chief of the General Staff, 1933-1938”, in Müller, *The Army, Politics and Society in Germany, 1933-1945: Studies on the Army's Relation to Nazism* (Manchester: Manchester University Press, 1987), pp. 54–99。

²³ Erich Ludendorff, *La guerre totale* (Paris: Flammarion, 1936)。1920 年代における国防最高会議の常設事務局長で産業動員の専門家による著書 General Bernard Serrigny, *L'Allemagne face à la guerre totale* (Paris: Grasset, 1940) は、経済の破綻によるドイツの崩壊を予言している。経済学者リュック・フォーヴェル (Luc Fauvel) の博士論文 *Problèmes économiques de la guerre totale* (Paris: Librairie du Recueil Sirey, 1940) も参照。

時国家』とし、本文中では「総力戦」を「全体主義戦争」に変えた²⁴。しかし、第二次世界大戦勃発後、「総力戦」は英語として一般的な用語となった²⁵。その成功はアメリカのジャーナリスト、ウィリアム・シャイラー (William Shirer) の努力と関係しているようで、彼はベストセラーとなった『ベルリン日記』の 1938 年 10 月 29 日のくだりで、当時、ルーデンドルフの著書が、ドイツで「最も需要が高かったノンフィクション作品」の一つであったと述べている。その日記もまた、その概念をある程度、詳細に記述している²⁶。多数のドイツからの亡命者もまた時流に乗り、迫りくる「新しい」ドイツの戦争警鐘を発した²⁷。このように、ルーデンドルフが概念化した総力戦の理論は、国内でも国際的にも成功を収めた。最後に、それが実際にはどうなったかを見てみたい。

決定的な戦闘は総力戦を打ち負かす

第二次世界大戦の変わらないイメージの一つ、すなわちテレビのドキュメンタリー番組（および YouTube）におけるお決まりのパターンは、1943 年 2 月 18 日にベルリン競技場で行われたヒトラーの宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルス (Joseph Goebbels) の演説である。この演説の重要な点は、聴衆に向けて発せられた問い、「皆さんは総力戦を欲するか」である。それに対する聴衆のドイツ社会のおそらくは典型的な反応は「ヤー！」という歓喜の答えであった。そして、彼らは手を高くかざし、「ジークハイル！指導者の命令に従う！我々は後に続く」と繰り返した。ゲッベルスはさらに 9 個の質問をし、聴衆をドイツ国民の動員に完全に賛成させた。ユンガーに言わせれば、最奥の神経に刻み込んだのである。しかし、巨大な観客席の反応によってドイツ国民全体が総力戦を受け入れたとするのは正しくない。その演説は慎重に計画された出し物であり、戦争努力

²⁴ General [Erich] Ludendorff, *The Nation at War*, trans. A. S. Rapoport (London: Hutchinson, [1936]). “Totalitarian” はもちろん、今でもナチスや大衆を基盤とする独裁政権と結び付いた英語の形容詞である。

²⁵ *Oxford English Dictionary*, 2nd ed., s.v. “total war”を参照。

²⁶ William Shirer, *Berlin Diary: The Journal of a Foreign Correspondent, 1934–1941* (New York: Knopff, 1941), pp. 239–240 and 86.

²⁷ 例えば、Helmut Klotz, *Der neue deutsche Krieg*, 2nd ed. (Paris: Selbstverlag des Verfassers, 1937)。同書にはフランス語訳もある。また、Albert Schreiner, *Vom totalen Krieg zur totalen Niederlage Hitlers* (Paris: Editions Prométhée, 1939)も参照。他のより有名な例としては、エドワード・アール (Edward Mead Earle) が 1943 年に編集した *Makers of Modern Strategy* へのドイツ人、ハンス・ロスフェルス (Hans Rothfels)、ハジョ・ホルボルン (Hajo Holborn)、ハンス・フライヤー (Hans Speier) による寄稿がある。ルーデンドルフの著書は一般的でなく、商標にすぎないというチックーリング (Chickering) の見解 (註 2) は、やや誇張気味であるように思われる。

を高めるための国民的な準備をより広く試すことを意図したものにはすぎない²⁸。東部戦線のスターリングラードでの悲劇により、軍指導層は兵士と武器を追加要求した。しかし、ナチス指導層は五体満足な男性をすべて前線に送り、五体満足な女性をすべて家庭から引き出して武器を製造させることを可能にする全国規模の徴兵制を導入するのに長く反対していた。その演説への大衆の反応は期待外れであった。地方の政党の指導者たちは即座に、国全体の民衆の意見はベルリン競技場の聴衆の意見とは異なると報告した。沸き上がる不人気と部内からの反対を恐れて、ナチスの指導者は総動員を再び延期した²⁹。

第二次世界大戦中のナチス指導層の行為にはこのようにいくらかの矛盾が見られる。他方、彼らは総力戦のレトリックを完全に受け入れていた。また、彼らは東部戦線や、さらには西部戦線でも、益々政治的、戦略的レベルで総力戦の目的を追求した。しかし、彼らは銃後の完全な動員という究極的な成功のための重要な前提条件をクリアすることには、二の足を踏んだ。1933年1月に政権の座についてから精力的に彼らの内なる敵を迫害して、ルーデンドルフが要求した心理的一体感を構築しようとしていたにもかかわらず、彼らは国全体を真の総力戦的基盤の上に置くことによって、国民の紐帯の力を試すことをためらった。彼らが最終的にそうした時には、すでに遅すぎ、政権も国民も連合国の優勢な力に屈服した。

敗北には別の驚きもあった。ドイツを打ち負かした戦略的技術は、総力戦とは関係ないものであった。総力戦の思想は連合国を魅了し、連合国にはドイツ国民、ドイツ軍、ナチスとその諸機関、そして、ドイツ国家の区別がはっきり分からなかった。連合国は再びドイツ国民全体を彼らの敵としてとらえるようになった。しかし、ドイツが降伏した時、ドイツ——ナチス党、ドイツ軍、国家、そして、国民は——は決定的な戦闘に関連する方法によって敗けたと判断した。首都ベルリンをめぐる戦いでドイツ正規軍が敗れた瞬間、敵対行為は終了した。残存部隊は降伏し、軍隊とともに国家と国民も連合国の前にひれ伏した。数百万のドイツ人男女はまだ戦う力を保持していたが、暴動は起きず、大衆動員もなく、非正規軍による戦闘の継続もなかった。60年後、イラクとアフガニスタンにおいて我々が目撃したような反乱は起きなかった。

ヨーロッパにおける第二次世界大戦の終末の性質は、決定的な戦闘の慣行が機能したという命題を裏付ける。なぜなら、それが戦争を遂行する正しい方法であると認められ

²⁸ Bernhard R. Kroener, "Wollt ihr den totalen Krieg ...? Die Angst vor dem totalen Krieg. Das Dritte Reich in der Winterkrise 1942/43", in *La guerre totale, La défense totale, 1789-2000*, Actes XXVIe Congrès International d'Histoire Militaire (Stockholm, 2001), pp. 120-129.

²⁹ Adam Tooze, *The Wages of Destruction: The Making and Breaking of the Nazi Economy* (London: Allen Lane, 2006).

ていたからである。予想される勝者と批判的に言えば敗者の双方は、その正当な戦いが効果的に戦争行為を制御し得ることを受け入れていたからである。総力戦の思想とその採用の歴史は、これが決定的な戦闘には何らかのより深い単に歴史を超越した正当性があるからではないことを示している。むしろ、優越した技術は熟考した末の選択と同意の結果であった。近代国家がその手段を偶然にも所有したために、総力戦が生じたのではないように、それは人々の意思によって生じ得るのである。ヨーロッパで敵対する兵士、政治家、そして、社会が、決定的な戦闘が機能することを選択したために、それは機能できたのである。従って、戦争の勝敗は何らかの普遍的な規則に従うものではない。軍隊はどこでも同じ言語を使用しているわけではない。勝敗には敵味方の間の学習と交渉の過程が必要である。交渉は戦争中の武力衝突の合間にしばしば行われるが、国際的な軍事的、政治的文献の中での議論の力によってもなされる。

平時にクラウゼヴィッツとルーデンドルフは二つの異なる方法で、政治的確信や戦争を遂行する軍事的嗜好と共鳴する思想の出版を通じて、国際共同体を準備した。ルーデンドルフの戦争方法がクラウゼヴィッツの方法に負けたというのは、あらかじめ決められていたことではない。総力戦はクラウゼヴィッツの決定的な戦争以上に戦争を客観的で科学的な過程からなるものにした。それはあらゆる敵を殲滅する決定的で完全に安全な勝利という誘惑に満ちた約束を提供した。実際、勝者はすべてを獲得することができよう。政治的成功に依存した決定的な戦闘における敵の協力は不必要であろう。1870年のセダンやメッツの戦いで正規軍が敗れた後も、フランスが降伏を拒否し続けたことや、1918年にドイツが西部戦線で発された判断の受け入れを拒否したことは、決定的な戦闘が戦争の決着をつけるのに政治的効果のない方法であり、歴史のがらくたに過ぎないことを示唆している。1945年の幸運な復活は、政治的支持を失った総力戦の驚くべき結果であった。それがもたらした恐怖は政治的には明らかにドイツにとって逆効果で、しかも、連合国が発生させるには政治的に極めて困難であったが、異なる戦略的技術の模索を促した。敵をそれほど包括的に特定せず、国家全体の死よりも、降伏というより魅力的な瞬間と同一視されるものであった³⁰。決定的な戦闘は戦争を遂行し、それを終わらせるために、予行演習が十分になされたなじみの深い別の可能な手段を提供した。この歴史的事例で、決定的な戦闘は戦争を最終的に終結させるに十分な政治的な魅力を得た。事実、それが極めて良好に機能したため、途上国の多くの軍人は、先進国の間では、その技術はどこでも永続的に機能するという信条をかなり強くした。冷戦期に総力戦の亡霊が消えるまで時間がかかったが、破壊手段は徐々に姿を消していき、社会の総

³⁰ ベック将軍はこの転換の好例を示している。彼の 1942 年 6 月の講演“Die Lehre vom totalen Kriege: Eine kritische Auseinandersetzung” (Beck, Studien, pp. 227–258) を参照。

動員はもはや必要とされなくなった。たとえ政治の変化によって益々その性格が曖昧なものになっているとしても、戦争、特に核戦争が一段と社会に忌み嫌われるものとなるにつれて、軍隊は縮小され、職業化され、また、幸いにして、制服を着た正規軍との決定的な戦闘に向けての準備に集中するようになった。